

韓国的価値意識の構造

水野邦彦

はじめに

韓国人の価値の葛藤や価値観の混乱が指摘されて久しい。これは急速な工業化と経済成長、そして情報化社会の到来という、近代的な社会変動にしたがって表面化してきた問題である。

しかし、価値葛藤や価値観の混乱がしばしば指摘されるにもかかわらず、韓国社会と人々の生活がそのまま持続してきたのはなぜか。たしかに統一的価値観は喪失し、価値観が多様化しているように思われるが、それでも国民生活のレベルで大きな変化が現われているとはいえない。このような現状は、ただ並列的な価値観が葛藤を起こしているというだけでは説明がつかない。なら

かの傾向が価値意識の枠となつて人々の生活感性を方向づけていると考えられる。そこで重要なのは、モデル的価値理念の変化や概念上の価値混乱ではなく、人々の生活感性としての価値意識の構造を説明することである。したがって、価値観というより価値意識の研究が必要となる。

本稿ではまず、従来指摘されてきた韓国人の価値意識とその変動および齟齬を検討し、その作業をとおして韓国人の価値意識の基本構造を浮き彫りにして、それが韓国社会を特徴づけているさまを描写しようと思う。そして、この価値意識によって方向づけられている人間関係に注目し、人間の自由・平等という面での問題点を明らかにしたい。

第一節 韓国の因襲的価値意識と今日の齟齬状況

工業化・国際化・情報化の波を受けて韓国経済は高度成長を果たし、それにつれて社会状況も変化した。欧米流の合理性・個人主義が韓国にも入りこみ、儒教的伝統を色濃く反映したかたちで安定していた従来の人間関係、社会規範、秩序、価値基準などが揺らぎはじめた。これは韓国の社会学者・倫理学者たちも注目するところで、すでに多くの論考が表われている。まず韓国人の価値意識と現代の価値葛藤にかんする先行研究をいくつかあげ、問題点を整理してみよう。

裴龍光氏は、行為の指針として支配的影響力を有する文化が依然として儒教文化であることは間違いないとしたうえで、韓国の儒教的・伝統的価値意識に、家族主義・位階意識・主情主義・形式主義・保守的傾向の五傾向を見いだしている(裴, 2008)。まず(1)家族主義は、韓国人の価値観や意識構造を論じようとするとき誰もがまっさきに挙げる特性であり、これが韓国社会全体の価値意識の原型となっている。家族主義の特性は韓国の価値意識のうちもっとも特徴的なものであるから、これに

ついてはのちに再度とりあげるが、これと欧米の個人主義との間で葛藤が生じていることを指摘しておこう。

さらに「このような家族主義の人間関係と道徳規範の発達は伝統社会の秩序の維持に寄与するところがたいへん大きく、過度の人情主義・縁故第一の態度を助長し、あらゆる社会組織において垂直的・縦的な位階構造をもたらし」てきた。ここに(2)位階意識を指摘することができる。韓国においては直接の人間関係はほとんどすべて垂直的な上下間の関係だと考えられ、今日にいたるまで「平等な人格の関係ではなく、年齢や性別、身分や地位によって徹底した秩序意識をもった社会構造を維持してきた」のである。この点もやはり韓国社会の人間関係におけるきわめて大きな特質であり、そして近代的な市民社会的人間関係とは齟齬をきたすものである。

つづけて裴龍光氏は、(3)対人関係において気分や感情などの私的要因が先立つという主情主義、(4)内容や実質より形式的儀礼を重んじる形式主義をあげている。最後の(5)保守的傾向とは、やはり儒教の影響で、「伝統を尊重し変化と革新を忌避する」傾向、「能力・業績・成功」といった後天的努力による獲得要因(achieved factor)

に対して、年齢・性・縁故など生まれもった素質である
帰属要因 (ascribed factor) を重視する態度」を意味
している。これらの価値意識上の特性が今日の葛藤の原
因になっていることはすぐに理解できるだろう。

つぎに李相周氏は韓国社会の伝統的価値意識として、
宿命主義的自然観、道徳主義的人間観、人情主義的人間
観、権威主義的序列観、家族主義的集合体観の五つを指
摘し(李、911)、さらにそれらに起因する価値葛藤とし
て、集団主義／個人主義、道徳主義／物質主義、平等
主義／権威主義、合理主義／人情主義をあげている(李、
25-27)。これらはおおむね先の裴龍光氏の分析と重なり
あうものであるが、ここではじめてあげられた宿命主義
的自然観についてふれておこう。これは人間が外部世界
を支配していると信ずるのではなく、外部世界が人間を
支配していると信ずる外的統制観 (external control)
であり、自然との調和ないし自然への服従を指向するも
のである。ただしこの価値観はもっぱら自然と人間との
関係にそくしたもので、人間と人間との関係や社会的価
値規範とは直接関係がなさそうに思われるので、本稿で
は除外しておこう。

林煥燮氏は伝統的韓国社会の規範文化の特徴としてつ
ぎの三点をあげている(林、210-213)。まず(1)いくつも
の世代にわたって受けつがれてきた伝統的類型として民
習の形態に慣習化してきたこと、(2)人間関係を位階的・
序列的に規定していること、(3)集団への帰属と忠誠が強
調される集団主義的性格を帯びていることである。この
(2)(3)の点はすでに見た価値意識の特性のなかに含まれる
ものであるし、(1)はそれが伝統的類型として民衆のなか
に定着したことの指摘であり、既出の特性に新たな内容
を付加するものではない。

また林煥燮氏は現代韓国社会の規範の混乱と葛藤とし
て、(1)権威主義的規範／平等主義的規範、(2)集団主義的
規範／個人主義的規範、(3)伝統主義的規範／合理主義的
規範、という三つの対立を指摘したうえで、(3)のような
「伝統の断絶と新たな合理主義的行為様式の未類型化」
は規範と倫理の空白状態すなわち無規範状態をひきおこ
し、そこに「手段と方法をわきまえず目的さえ達成すれ
ばよいという便法主義」が跋扈するという。これはさき
に李相周氏があげていた物質主義、あるいは快樂主義、
利那的消費主義ともいうべき傾向につながるものである。

以上の見解によって、韓国社会に浸透している価値意識とその「混乱」状況の輪郭を描くことができる。まず韓国で一般化している価値意識の特質を列挙してみると、家族主義・人間関係の序列性・情誼性・形式重視・保守的傾向などの項目が立てられる。これらの特質が欧米型の合理性や個人主義と齟齬をきたして「価値観の葛藤」をひきおこしているのである。ところで、この韓国社会に浸透している価値意識はすべて家族主義に起因するとは考えられないだろうか。

第二節 家族主義

韓国人の社会規範としての価値意識の原型を家族主義のうちに見いだそうとする理由として、韓国の家族関係のなかに前記の価値意識の諸特質がみとめられることを指摘してみよう。

人間関係のあり方はその場での互いの呼称に端的に表われる。韓国の家族においては各人の呼称としてそれぞれ固有の名が用いられることは少なく、たいていは自分との関係を示す呼び方がされる。たしかに「お父さん」「お母さん」「お兄さん」「お姉さん」という呼び方が一

般的なのは日本でも同じであるが、韓国では家族や親戚の呼称が日本以上に発達している。たとえば、妹にとっての「お兄さん」と弟にとっての「お兄さん」は呼び方が異なるし、妹にとっての「お姉さん」と弟にとっての「お姉さん」はちがう言葉である。「おじさん」にしても、父方のおじか母方のおじか、あるいはおばの配偶者としてのおじかによって呼称が異なるし、妻の兄弟に対しても固有な呼び方がある。自分の末の弟に対しては、当人の名前ではなく「マンネ」(末っ子)と呼んだりする。この点について、韓国の家族研究の第一人者である崔在錫氏はつぎのように論じている。

「韓国人の親族呼称は、親密感や平等主義あるいは個人の性質が表示される側面を無視し、おもに公式性・權威・尊敬の役割表示の機能を果たしているといえる。

また親族員の業績や個人的性質を表わす面はほとんどなく、世代・年齢・性などの身分秩序を強調する面が際だっている。これは家族内における世代や年齢などの上下の身分差異にもとづいた権利と義務を強調する韓国の親族組織のひとつの特徴といえる。自分より上の世代の親族員に対しては絶対にその個人名で呼ぶことはなく、

いつでも親族呼称でのみ呼ぶことは、まさしくここに起因するものである。」(崔①、30-31)

こうした習慣から読みとれるのは、韓国人たちは家族のなかでの相手の位置づけをまず第一に考え、その位置によって当人を認定するということである。自分の存在もまた、自分が属する家族のなかに位置づけられてこそ認められるのである。したがって韓国人にとって家族関係とは自分の存在を認定してくれる何よりも大切な集合体といえる。

家族内の人間関係は親子の関係を軸に、兄弟の序列、年齢の高低、そして性別によって秩序づけられている。すなわち基本的に上下関係にもとづいて個々の構成員が序列化されているのである。日本でも類似した傾向はみられるが韓国の家族ほど厳格ではない。さきに述べたように韓国人がみずからすすんで家族的人間関係を求めるということは、このような上下関係もしくは序列的關係を積極的に受け入れることを意味する。韓国人にとって家族関係が社会関係の原型である以上、序列意識は人間関係の基本的属性となつていのである。こうして人々は序列意識と抱きあわせてアイデンティティ

ィを獲得する。韓国人のアイデンティティは基本的に家族のなかの位置として形成されるのである。

こうして形成されたアイデンティティをもって人々は社会に出てゆく。崔在錫氏がいうように、家における生活原理は社会生活や国家生活にまで拡大延長されるべきもので、家の上下の結合原理は家の外の社会生活・国家生活までも支配する(崔②、220)。したがって社会で築かれる人間関係においても人々は序列意識を発揮させる。家族においてと同様に、社会においても序列意識は人間関係の不可欠な要素なのであり、序列関係・上下関係が定まらないと人々はむしろ落ちつかない。安定した人間関係をつくるためにも人々は積極的に互いの序列関係を確定しようとする。「自然に、位階構造の下位にある者は身分的劣等意識をもつようになり、上位者の顔色をうかがうようになつて、上の人は下の人に君臨しようとする態度を強くとするようになった」(裴、66)。

さて第一節では韓国人の価値意識の特質として(1)家族主義・(2)人間関係の序列性・(3)情誼性・(4)形式重視・(5)保守的傾向を列挙したが、これらのうち(2)人間関係の序列性が家族のなかで形成されることは今みたとおりであ

る。つぎに(3)情誼性であるが、これも家族における感情的紐帯を原型としているといえる。「家族というのは本来、便宜や利益のために計画的に定められた団体ではなく、性と血縁の紐帯をとおして自然的に発生した共同体であるから、その内部の秩序維持のために重要なのは、法や規則よりも温情と愛である」(金①、1992)。こうして家族において感情的紐帯が築かれ、それが家族外にも広がってゆくのは、農耕社会一般にみられる現象である。韓国では血縁・地縁・学縁の強さがしばしば論じられるが、家族的紐帯を前提しなければそれらが成り立ちえないことは明らかであろう。

(4)形式重視と(5)保守的傾向も、家族のなかで因襲的に受けつがれてきた儀礼や礼節という固定的形式を維持し、そしてその形式にのっとって生活環境を安定させようという指向性と考えれば、やはり家族主義に起因する価値意識だといえることができる。裴龍光氏のいう「能力・業績・成功といった後天的努力による獲得要因に対して、年齢・性・縁故など生まれもった素質である帰属要因を重視する態度」とは、人々の家族的〈存在被拘束性〉を決定的に重要視する人間観にほかならない。家族主義

(familism)は「一切の価値が家族集団の維持存続とその機能に関連して決定される社会組織の形態」(裴、65)と説明されるが、これは必然的に保守的色彩を帯びるものである。

自分の存在が家族における位置関係によって確認される以上、人は自分自身のためにも家族関係の堅持と強化につとめる。自己自身の〈生の維持と増大〉(J.M. Guyan)がとりもなおさず家族の絆の堅持と強化につながるのである。

以上のように韓国人に特徴的な価値意識は基本的に家族主義にもとづいているといえる。人間関係の序列性・情誼性・形式重視・保守的傾向もいわば家族主義から派生した価値意識と考えられる。韓国人にとって家族とはそれほど重い存在なのである。

思想的背景の点でいえば、そもそも儒教において何よりも強調されるのは家族ないし親族の倫理である。このことは、儒教倫理の基本綱領といふべき五倫のうち父子有親・夫婦有別・長幼有序の三つが家族関係の倫理であることに表われている。また韓国現代社会史の観点でもつぎのような指摘がなされている。

「韓国人たちの経済生活は世界のどの民族よりも家族中心的だと見なしてもそれほど間違いではないだろう。

日帝の植民統治、朝鮮戦争、戦後の混乱、急激な産業化などを、わずか一、二世代で経験し、韓国人たちはもっぱら家族を中心に壮絶な生存闘争をくりひろげてきたといっても過言ではない。それゆえ大多数の韓国人にとって家族主義は選択の余地がない生存の様式であった。彼らには、一日一日の生活が家族の利益のために望ましいものでなければならぬという考えが脳裏に焼きついており、実際そのように生活を営んでいる。個人の次元のこのような態度は経済全体の次元でも非常に重要な結果をもたらしている。」(愼・張、74)

じっさい韓国社会における家族への帰属と忠誠は、同じ儒教文化圏に属する中国や日本よりも強く、このような「極度の家族中心主義的秩序は韓国社会を性格づける核心的特質」(張①、222)と考えられる。

第三節 価値意識の枠と序列性

第二節でみたように、このような価値意識の分析とあわせて、価値意識の動揺も指摘されている。ここではく

りかえさないが、それらはおおむね、儒教色の濃い韓国の因襲的価値意識と近代市民社会に根をおろしている欧米の合理的価値意識との齟齬によるものだといっているであろう。この齟齬状況下での韓国人の意識変動にかなりいくつかの見解をまず見てみよう。

「韓国人は」伝統的権威主義の価値観から脱皮し、個人の能力と成就による普遍的基準にもとづいた均等な機会、公正な競争、水平的人間関係などとして特徴づけられる平等主義的価値観を志向してきている。」(裴、77)

「韓国社会ではすでに近代化過程で家族・階層・組織体・地域社会・国家など種々の水準の集合体において個別化現象が目立っており、将来の改変がさらに深刻化する見通しである。自分の行動路線や将来は集団や他人のためにではなく、みずからの判断で決定し、みずからの努力と能力によって左右され、みずから責任を負わなければならないという個人主義的価値観がすでに韓国人にかなり深く内面化している。」(李、32)

「人間関係において上下の位階性と序列性を強調し、とくに下の者の上の者に対する礼節と服従を要求していた『伝統的』な権威主義的規範体系が今日ではなはだしく

弱まっており、それに代わって平等を強調する「現代的」な規範が強まっているのが「一般的な趨勢だといえる。」(林、213-214)

「いんにち韓国の家族価値観において伝統的な儒教価値観と西欧的価値観が妥協的に共存しているが、その変遷方向は西欧的なものへ向かっていると見える。」(洪、83)

右の論者たちは旧来の価値意識から欧米流の合理的価値意識への移行が見られると考えている。要するにこれは「近代化」がひきつづきすすんでゆくとする予測である。そうした見解に対して權泰煥氏は千人あまりの国民の協力を得て行なった意識調査をふまえて、「個人指向・現在指向・革新指向・平等指向が近代的な価値であり、したがって今後このような方向に私たちの社会の支配的価値が形成されてゆくだろうと仮定することは非常にむずかしい。おそらく相当の期間、価値観の葛藤・混乱がつづくことは避けられないであろう」(權、85)として、価値意識の「近代化」の進行に疑問を呈する。さきの金泰吉氏も「韓国の家族主義もしだいにその勢力が衰退する傾向が見られるが、いまだにその残影は相

当に濃厚なままであると思われる」(金①、181)と記している。このように家族主義がそれでもなお強いという点が重要である。論者全員が、因襲的価値意識とりわけ家族主義の強固性の認識では一致しながら、それが少しずつ弱まってゆくのか、それとも強靱な生命力を維持してゆくのかという点で、意見がわかれるのである。

ここで予測されるのは、家族主義に代表される因襲的価値意識はたんに量的な意味で強いのではなく、いわば枠(framework)として韓国人の生活感性に深く根をおろしているのではないかということである。だからそれは強いのだと考えられる。家族主義的価値意識が枠となっているからこそ、そこからの脱皮が論じられたり、それが今日なお強靱であることが指摘されたりするのである。

枠は規範であり形式である。儒教的儀礼における形式の重視はそのことを象徴的に表わしている。そして、枠はまさに形式であるがゆえに形骸化しやすいのである。だとすると家族主義的価値意識が時代とともに形骸化してゆくのもいわば必然的なことかもしれない。しばしば指摘される「価値観の混乱」もこの枠の形骸化現象にほ

かならないわけだが、家族主義的価値観が形骸化するとすれば、その内実として何が入りこんできたのだろうか。いうまでもなく、それは欧米流の合理性と個人主義を中軸とした「近代的」価値意識である。しかもそれは知らず知らずのうちに浸透してきたのである。高永復氏はこのことを韓国の歴史的経緯と関連させてつぎのように論じている。

「解放後今日までの韓国の文化構造のひとつの特異な点は、外部からの文化衝撃によって価値創造の作業が自律性に立脚した自然発生的な過程を経ることができなかったことである。八月一五日以降の開放体制は外来文化を無批判に受け入れ、それを現実生活を規制する基準文化と誤認させた。もちろんこのような現象をもたらしたのには、いくつかの要因がある。

そのうちもっとも重要なものは、日本の久しい植民政策が文化の受容層をして日本文化、それも西欧文化の模倣文化だけを教示し、在来の韓国文化の発掘や整備の機会をまったく提供しなかったため、韓国の知識層に意識上の在来文化の断絶を招来してしまったという事実である。したがって八月一五日の解放後、波のように押しよ

せてきた西欧文化を主体的に受け入れられる批判能力を喪失し、くわえて韓国の知識層を構成する外遊知識人の国際主義的思考が政策決定の中心となってきたため、韓国での西欧文化の伝播には何の抵抗や反撥もなく、その進行は順調だったのである。

そのため外来文化の受容は、それがとうぜん経験すべき在来文化との衝突もなく成しとげられ、在来文化に深刻な解体や再構成の契機を与えることなく、既存の在来文化のうえにそのまま外来文化を逆さにしてかぶせる複合構造をつくりだした。在来文化の表層と外来文化の表層とが互いに接触し、皮相的ないくつかの文化受容もたらされただけであった。」(高①、115)

解放後の韓国には欧米文化が「波のように押しよせて」きて人々はそれをいわば未消化のままのみこんでしまった。工業化と経済成長が急速にすすんだため、本来それにとりまとうべき人々の価値意識の構造的変化が起らず、ただ外来文化の表層だけ、すなわち目の前のきらびやかな「現実」だけを人々は日常生活のなかで受け入れていったのである。

こうして価値意識の枠は従来そのままでありながら、現

実には価値体系の異なる欧米文化と直面したため、枠は必然的に形骸化したのである。この価値意識の齟齬は潜在的にすすんだ。それは枠としての因襲的価値意識の形骸化過程が日常生活において無自覚のうちに進行したという理由と、そもそも因襲的価値意識が枠であったという理由による。因襲的価値意識が枠であり器であったからこそ、その内部に異質なものを受け入れたのであって、さもなければ因襲的価値意識と欧米的価値意識が異なる社会規範として正面からぶつかっていたはずである。ここにも因襲的価値意識が枠であることの根拠がみられる。さて社会規範として通用する枠さえ保っていれば、その中身は実際にはさほど問題にならないことが多い。たとえば第一節であげた物質主義・快楽主義・利他的消費主義を思い浮かべればよいし、あるいは集団的利己主義や実質的合理性を考えてもよい。とくに「物質主義」と称されるものは韓国人のなかにかなり深く浸透しているようである。社会秩序や人間関係としてはとりたてて非難されなくとも、より倫理的な意味で問題視される場合がある。李相周氏も物質主義を道徳主義と対立するものとし、

いへん強調されており、工業化の経済的物質的成果によって刺戟された人々の物質的欲求は物質主義価値観を正當化する傾向がある」(李、200)と述べている。また高範瑞氏も今日の韓国人を支配している価値観のひとつに物質主義をあげて批判している(高②、269-275)。興味深いのは裴龍光氏のつぎのような論述である。

「伝統的人本主義が物質主義の方向に変化しはじめたことは工業化などの社会構造的変化の結果であった。したがって今日の韓国社会における物質主義は、プロテスタント倫理のような倫理体系にもとづくものではなく、物質の所有が伝統社会における身分的地位に代わるという地位体系の変化過程で急増した拜金主義的性格を帯びているのである。すなわち(それは)非倫理的物質的蓄積と誇示的消費を特徴とする物質的成功主義として要約されるものである。」(裴、77)

物質的消費そのものが自己目的化したり消費が新たな欲望をかきたてたりすることは消費社会一般の特徴であるが、韓国の場合、消費の誇示的側面がとくに強いようである。「誇示的消費」とはヴェブレン(J. B. Veblen)の造語であるが、韓国人の価値意識の研究において重要

な手がかかりとなる鍵概念である。

韓国社会は儒教の影響により上下関係がはっきりした序列的社会であった。これは前述のように家族内での序列をモデルにして社会全体に拡大されたものであるが、社会において序列を決めるのは与えられた身分であった。時代が変わって制度的な身分的地位は解消されたはずだが、序列意識は枠として残った。そこで旧来の身分的地位にかわって人々の序列を決定づける基準として登場したのが物質の所有である。しかも物質をただ所有していればよいだけでなく、他人にそれを見せて、物質所有の程度、という点で自分の位置を認定させなければならぬ。物質はただ自分の生活上の必要から消費するのではなく、他人に見せつけるという意味あいがかめられており、そのため誇示的消費と呼ばれるのである。

たしかに一見したところ消費社会や物質主義が到来して人々の価値意識が変化したかに思われる。しかし実際は旧来の身分制度がしめていた序列基準の位置に物質主義が入りこんだだけ、つまり基準が変わっただけであって、序列的価値意識の枠は変わっていない。家族主義とそこから派生した序列意識は、消費社会の到来後も枠と

して残りつづけている。李相周氏は現代韓国人の「行動上の価値観」と「観念上の価値観」が乖離していることを指摘し、「行動上の価値観」は物質主義的傾向がつよいのに対し「観念上の価値観」(言葉で表現された価値観)は道徳主義的傾向を帯びている」と論じている(李、200)。また金泰吉氏も「行動の原動力としての価値観」と「観念としての価値観」が存在することを指摘する(金①、192-194)。だがここで対立的にとらえられている二つの価値観は、正確にいえば枠と中身との関係にあると考えられる。このうちより容易に表面化するのは、社会規範の形式である枠のほうである。李相周氏が「観念上の価値観」を言葉で表現された価値観と説明したのは、まさにそのためである。

さらに「韓国社会は近代性の段階を経るまえに後期資本主義段階の生産組織と文化を導入することによって解きたい文化的矛盾におちいつている」という指摘もある(車、200)。韓国の近代化が遅れたのはもちろん日帝侵略によるところが大きいだが、ここでいう文化的矛盾とは、因襲的価値意識という枠と、その内部に入りこんできた資本主義的・消費社会的価値意識との矛盾であると

解釈できる。こうして人々は枠と中身との齟齬を気にとめず外来文化や消費文化を消化不良のままその枠のなかに取りこみ、新たな基準によって序列性を生みだしているのである。

第四節 個人の自立と自律

「世界史は人間の自己解放の歴史である」と車仁錫氏はいう。しかし韓国では必ずしも人間の解放や民主化がすすんでいるとはいえないようである。「韓国の文化も例外なく世界史の流れのなかで変化を蒙るようになるであろう。だが今日の状況は発展でなく、うまくゆかない近代化である。脱伝統過程で廃棄されなければならぬ古い価値が資本主義の否定的傾向と親和性をもっていることによって、韓国社会は自律性の段階をへることなく二一世紀に向かうという局面にある」(車、18)。韓国の徹底した序列社会・序列意識は明らかに民主的とはいえないように思われる。それは人々を固定的位置に拘束するもので、まさに解放の対極にあるといえる。もちろんこれは韓国一国の問題ではなく、東アジアの儒教文化圏に共通する問題である。

民主主義はいうまでもなく自由で平等な自律的個人を前提する。「個人の解放と自由を強調する強力な価値体系および信念体系」(Turner、375)という側面は、民主主義の本質に属する。そのような個人、主体としての個人が確立されていないところには民主主義も市民社会も形成されないのではないだろうか。「伝播文化であった自由主義も民主主義も人々の生活の外皮的側面で漂流しただけで、生活の基底に定着するまでには成功しえなかったのは、結局それが私たちの社会生活の集合表象の具現としての創造的価値規範ではなかったからなのである」(高①、115-116)という指摘は、正鵠をえた評言であろう。

個人というのは基本的に西洋出自の概念であり、東アジアの儒教文化圏では個人が個人として存立し認定されることは例外的だったように思われる。すでに見たとおり韓国社会では人は家族関係のなかに位置づけられてはじめて存在が認められるのであって、人が家族をまったく離れて個人として認定されることはありえなかった。この人間関係の構造が社会全体に拡大されていたとすれば、社会においても個人は原理的に成立しえなかった。

そこでは「人間と人間が同等な権利で自由に接近し協調するのではなく、身分と身分、格式と格式が交渉する封建的人間関係」(高①、128)が基本だったのである。

何も私は西洋文化が無条件によく東アジアの文化はもともと劣っているなどというつもりはない。ただ、東アジアの儒教文化が人々を不平等な関係に位置づけ、自由を奪うとしたら、それはやはり根本的に改善すべきだと思われる。儒教文化は「西洋の近代思想が強調した人間解放と個人の自覚を抑圧し、結果的に人間の尊厳性を萎縮させる点に、非人間的側面を露呈した」(李、10)といわなければならぬ。この状態を克服する第一歩はやはり個人の確立ではないだろうか。

個人主義という言葉は韓国ではむしろ否定的に語られる傾向がある。多くの場合、個人主義といえば「悪いもの」であり、嫌悪の対象となる。「あの人はとても個人主義的だ」という言い方は、自分の利益ばかりを追求するタチの悪い人だということを意味するのであり、個人主義と利己主義が同じ意味で用いられるのである(白、176)。しかしこの語法は必要以上に否定的なようである。「韓国社会において個人主義を罵倒し集団主義を正当化

するのにもっとも有用なはたらきをするのが、まさにこの利己的個人主義なのである。個人主義という言葉はつねに利己と放縦と無秩序といったあらゆる悪徳の代名詞としてよく用いられており、個人主義者は集団の目標に無関心で無責任な日和見主義者を指称する言葉として用いられる」(李、33)。このような意味で「個人」を想定するのは不適切であろう。個人的であることと利己的であることは異なるのである。のみならず個人主義という言葉は因襲的・閉鎖的集団を維持するイデオロギーともなりうるであろう。むしろ逆に、個人主義と対立する集団主義のほうがより利己的となりうるようである。高範瑞氏は韓国の集団主義的執着をつぎのように手きびしく批判している。

「共同体意識は、情実主義において見いだされる家族や同窓や同郷人に対する非道德的で病的な執着関係による凝集意識とは区別されなければならない。そのような情実主義的執着は共同体ではなく、共同体を害し破壊する集団的利己主義なのである。共同体は主体的独立性をもった個人が理性と正義と発展のために結びつき、協同し協力することによって共同善を共同創造し、共同の課

題を共同遂行する集団のことである。韓国人にはこのような共同体を形成する能力が欠如しているため、宗親会・同窓会・同郷人会・契など各種のエセ共同体をつくることによって共同的生活の根をさがそうとする。このようなエセ共同体は構成員たちの間の心的紐帯関係をつよめる機能を果たすが、社会や国家の発展に寄与する生産的活動をするケースはほとんどない。」(高②、295)

集団的利己主義については李相周氏も「最近は個人の私益を集団の力を借りて一方的に追求するための社会行動があちこちで起こっており、今後このような集団化した利己主義がさらに蔓延する可能性が高い」と指摘している(李、25)。こうして個人主義/集団主義という面と利己的であるかないかという面とは異なる側面と考えなければならぬ。

右の高範瑞氏の論述にみられるように、韓国の集団は一般的にひとりひとりの自立した構成員によって形成されるのではなく、自分の帰属組織に依拠して人々が情実的に結びついて形成され、そこではべったりした人間関係が営まれる。張潤植氏は、相手に対する一種の義務感によって対人関係を持続形成し、何らかの特定の人や集

団に全人的に対することを全人主義と規定したうえで、つぎのように論ずる——「理想的な意味でいう契約関係においては人間相互関係が各人の権利・義務・実際の行為・思考の限界が明確に定義されているが、全人主義で強調されている人間関係——くりかえせば義理にもとづいて築かれる人間関係においては、各人の実際の行動・思慮・権利・義務などの明確な限界がなく、拡散しているのが特徴である」(張②、137)。

こうして韓国の因襲的集団では人と人とがべったりと結びついており、ひとりひとりの自立性と自律性が形成されにくい。そういう社会において人々を結合させる接着剤の役割を果たしているのは序列性と温情であろう。

これは、「家族に対する愛着ないし関心がほかの意欲や動機を圧倒し、行動の主導権を握るといふ生活態度」(金①、181)という家族主義の特質がほかの集団にも拡大されていることを考えれば、すぐに理解できる。右の張潤植氏のいう全人主義も、そこに固有な温情を生み出す土壌となっていると思われる。

もちろん韓国では民主主義制度がとりいれられているが、それは韓国人の間に根を張っている序列意識と原理

的に齟齬をきたすもので、実際にはなかなか韓国社会に定着しないようである。そこで民主主義と序列意識との不調和を調停し、民主主義の欠如をおぎなう役割を果たしているのが温情ではないだろうか。だが温情によって民主主義の体裁を維持することは、ただ表面上それを取り繕うにすぎず、むしろ民主主義を韓国人の間に定着させる妨げになるように思われる。すべての人々が解放される民主的な市民社会をつくろうとするのであれば、やはり人間ひとりひとりが個人として尊重されなければならぬであろう。そのためにはまず個人の自立と自律が確立されなければならない。それを実現するためには結局、第三節でみた因襲的価値意識の枠そのものを外さなければならぬように思われる。

結びにかえて

本稿では今日の韓国においてしばしば指摘される「価値観の混乱」状況を検討し、その作業をつうじて韓国人の価値意識の原型を家族主義のうちに見いだした。ここでいう家族主義とは何らかの理論体系ではなく、人が家族関係のなかで適切な位置を与えられてはじめて自己の

存在を確証しうることであり、いいかえれば人が自分のアイデンティティを家族における位置として獲得することを意味している。これは因襲的に価値意識の枠として韓国人一般の生活感性のなかに根をおろしてきた。人間関係の序列性、情誼性、形式重視、保守的傾向などの韓国人の価値意識の特徴も、この家族主義という枠から派生したものと考えられる。

家族主義的枠は「近代化」過程でそうとう形骸化しながらも生き残り、そこにふくまれていく序列意識が形をかえて発現する。つまり、かつては生まれつき与えられた身分によって人は社会的に序列化されていたが、身分制がなくなった今日では、物質の消費や住居の所有あるいは学歴によって序列化される。これは家族主義に起因する序列意識がいまなお強いことを示している。だが、人の存在が家族関係のなかではじめて認定されること、そしてそれが序列的關係であり、さらに人は社会においても序列化されることは、人間の解放や自由・平等の対極にあるといえる。人間の解放や自由・平等を実現しようとするのであれば、まず個人が確立されなければならぬ。自立的で自律的な個人によって民主的な社

会あるいは市民社会が形成されるのである。

日本でも決して市民社会は十分に確立されていないが、本稿で述べた家族主義的傾向はかなり弱まり、権威的秩序がくずれている。それに比例して個人の自立がいくらかすすんでいるが、同時に無規範状態もひろがっており、とくにこれは今日深刻な教育問題をひきおこしている。

それにくらべると韓国の方が社会秩序の「乱れ」ははるかに少なく、健全な社会環境が保たれているように見える。しかし韓国の社会環境が双手をあげて無条件に歓迎すべきものかという点では疑問が残る。その社会秩序の安定は序列的権威的道徳によって維持されているのではないだろうか。「道徳、それはいかに粉飾されていようとも、畢竟ひとつの集団が存続するための社会的統制手段の一種にすぎないのである」(金^②、200)。見かけ上、社会秩序が安定しているとしても、それが人々の不平等な序列関係を前提しているかぎり、人間の解放が実現されているとはいえないだろう。

「韓国の近年の経済成長と「先進国」化は周知のとおりである。しかし「めざましい経済成長にもかかわらず市民社会で期待される自我意識は成熟せず、むしろ快樂主

義におぼれた利己心が経済行為の動機となってしまったのである」(車、199)。だとすれば市民社会的自我意識の形成、つまり市民社会的個人の確立が求められるであろう。今から二〇年も前に韓完相氏は、市民社会の形成と建設が韓国の課題だとして、「民衆が主体的に多元的解放社会を建設しうる勢力に成長し成熟しなければならぬ」と論じ、人々の自立と自律の必要性を主張した(韓、200)。この主張にはいまなお説得力がある。

そのためには因襲的に韓国人の価値意識の枠として根づいてきた家族主義、とりわけその序列的側面の改変をせまられるであろう。家族主義の改変はなにも家族の親密な関係を否定し、家族の断絶や解体を意味するものではない。ただ、人々が家族の序列的関係のなかで位置を与えられて自己の存在を獲得するのではなく、ひとりひとりが個人として自立することが求められるのである。

引照文献 すべて韓国で発行されたものである。

高①…高永復「傳統主義と脱傳統主義」國際文化財團編『韓國の社會』時事英語社、一九八五年。

高②…高範瑞『價值觀研究』ナナム出版、一九九二年。

- 權・權泰煥「生の質」ソウル大學校社會科學研究所『轉換期の韓國社會』韓國日報社出版局、一九八七年。
- 金①・金泰吉『職業倫理と韓國人の價值觀』哲學と現實社、一九九七年。
- 金②・金永結「韓國社會の倫理的狀況」高麗大學校民族文化研究所『現代社會と傳統倫理』一九八六年。
- 裴・裴龍光「東西洋の規範文化の變化にかんする社會學的研究」韓國精神文化研究院『韓國社會の規範文化』、一九八三年。
- 白・白完基『民主主義文化論』ナナム出版、一九九四年。
- 慎・張・慎鋪廈・張慶燮『二一世紀韓國の家族と共同體文化』知識産業社、一九九六年。
- 李・李相周「解放四〇年・價值意識の變化と展望」ソウル大學校社會科學研究所編『價值意識の變化と展望』、一九八六年。
- 林・林煒燮『韓國の社會變動と價值觀』ナナム出版、一九九

- 四年。
- 張①・張慶燮「家族と社會構造」韓完相ほか『韓國社會學』民音社、一九九六年。
- 張②・張潤植「韓國社會構造論試図」國際文化財團編『韓國の社會』時事英語社、一九八五年。
- 車・車仁錫「脱傳統の文化」韓國哲學會編『文化哲學』哲學と現實社、一九九五年。
- 崔①・崔在錫「家族制度」國際文化財團編『韓國の社會』時事英語社、一九八五年。
- 崔②・崔在錫『改訂 韓國家族研究』一志社、一九八二年。
- 韓・韓完相「現代社會學の危機」經文社、一九七七年。
- 洪・洪承稷「價值志向の變化」韓國社會科學研究所編『韓國社會論』民音社、一九八〇年。
- Turner: J. H. Turner, et al./金文朝ほか訳『社會學理論の形成』イルシン社、一九九七年。

(一橋大學講師)